

# 4 アルボウイルスサーベイランスの流行予測を裏打ちした3症例とその情報周知について

県南家畜保健衛生所

萩原 茜・後田 徹志

アルボウイルスサーベイランス(以下、サーベイランス)は、ウイルスの国内への侵入を早期に察知することを目的に実施されており、その結果は主に生産現場への注意喚起に役立てられている。一方、長崎県での牛異常産ワクチンの接種率は近年低下傾向にあり、サーベイランス結果のみを用いた注意喚起には限界を感じている。今回、サーベイランスで確認されたウイルスが、実際に現場で異常産等を引き起こした症例に遭遇したのでその概要とともに複数回実施した情報周知の効果について報告する。

## 1 症例概要及び情報周知について

(1)令和5年度のサーベイランスにおいて、管内ではディアギュラウイルス(DAGV)、流行性出血病ウイルス血清型6(EHDV-6)に対する抗体が確認されたため、例年同様1月に当所季刊情報誌でこれらウイルスの流行について周知を行った(図-1)。

### 牛異常産関連ウイルスの動きが確認されました

アルボウイルス(蚊やカカなどの吸血昆虫で媒介されるウイルス)調査において、長崎県内の調査対象牛から流行性出血病ウイルス血清型6、ディアギュラウイルス、ブルータングウイルスの流行が確認されました。これから春先にかけて異常産が発生するリスクが高い状況ですので、以下の症状が見られた場合には当所まで連絡をお願いします。

	流行性出血病ウイルス血清型6	ディアギュラウイルス	ブルータングウイルス
初期:	発熱、元気消失、食欲減退、流涎、結膜の充血・浮腫、水様(膿性)鼻汁	流産、早産、死産、出生子牛の虚弱、自力哺乳不能、運動失調、起立不能、神経症状、眼球混濁、盲目	発熱、鼻汁、口腔・鼻粘膜・舌のチアノーゼ、腫脹、流涎、早産、出生子牛の先天異常(大脳欠損)
後期:	皮下浮腫、鼻腔・口腔粘膜の充血・うっ血・潰瘍、蹄冠部の潰瘍、流死産		※牛では不顕性感染が主
症状			
	(出典) 農研機構 動物衛生研究部門	(出典) 病性鑑定	(出典) 農研機構牛病カウアトラス
	ワクチンなし		
管内の流行	2016年、2020年	2002年、2019年、2022年	2002年

図-1

令和6年4月に診療獣医師から病性鑑定依頼があり、ミイラ胎子の病性鑑定を実施した結果、胎子の脳と胎盤から EHDV-6 の特異遺伝子が検出された(症例1)。(写真-1)なお管内一部地域においてミイラ胎子の娩出が複数発生してい

るとのことであった。この症例は5月にリーフレットで生産者に周知するとともに、7月には家畜衛生対策推進会議で管内獣医師に説明のうえ、病性鑑定への協力を求めた。

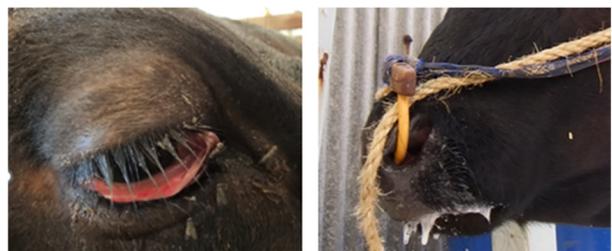


ミイラ胎子

胎盤

写真-1

(2)令和6年度のサーベイランスにおいて、管内では前年に引き続き EHDV-6 が確認されたほか、アイノウイルス(AINV)も確認された。令和6年10月には診療獣医師から嚥下困難及び流涎を呈する成牛の病性鑑定依頼があり、発症牛及び同居牛1頭の洗浄血球から EHDV-6 の特異遺伝子が検出され、その関与が強く疑われた(症例2)(写真-2)。



結膜の充血

流涎

写真-2

この症例については、サーベイランス結果とともに管内全診療獣医師宛に電子メールで周知を

行った。

(3) 同年12月、別農場で死産に関する病性鑑定依頼があり、各種検査結果から AINV 感染症と診断された(症例3)。当該農場では8月から12月の間に8例の死産が発生しており、異常産ワクチンは未接種であった。本症例とサーベイランス結果は令和7年1月の季刊情報誌にて周知し、同年2月に開催された当所主催の会議で診療獣医師を含む関係者に対し、異常産ワクチンの接種を生産者へ推奨していくよう協力を求めた。

## 2 まとめ

サーベイランス結果とともに実際の症例を交えて複数回周知したことにより、農家及び管内診療獣医師の危機意識を向上させ、例年5例程度であった異常産関連の病性鑑定依頼数が令和6年度には16例に増加した(図-2)。依頼件数の増加が異常産関連ウイルスの摘発につながり、その結果を周知することでさらに意識を向上させるという好循環が生まれた(図-3)。

た結果、異常産関連の病性鑑定依頼数は増え、危機意識向上につながったが、最終的な目的は管内の異常産ワクチンの接種率を高めることであるため、今後も効果的な情報周知、指導方法について追及していく必要がある。

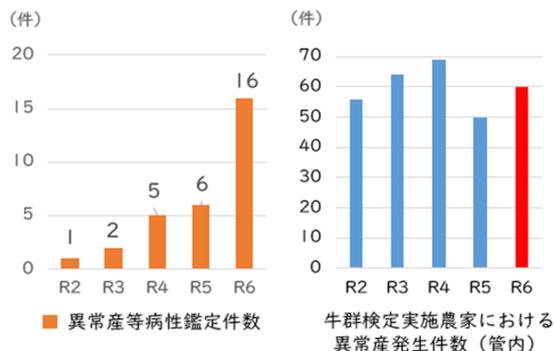


図-2

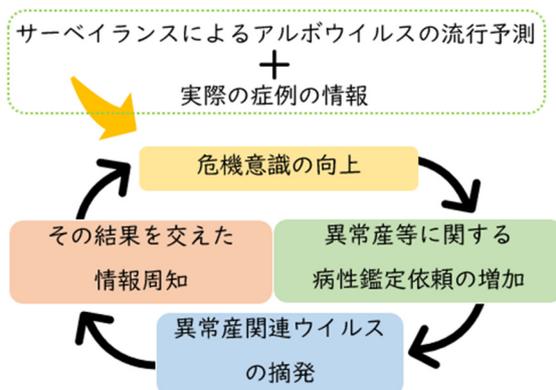


図-3

## 3 今後の課題

今回、実際の症例を交えて複数回情報周知し